

自由図書の一部 最優秀賞

須藤玲子さん 法学部政治学科2年

『朗読者』 ベルンハルト・シュリンク著/松永美穂訳 双葉社

何者になれるのか知ったとき、きっと本当の愛を知る

戦争犯罪者と聞いて、あなたはどのようなイメージをお持ちだろうか。元首相の東条英機や、ナチスを率いたアドルフ・ヒトラーなどを思い浮かべる人が多いのではないだろうか。どちらも、国家を破滅に導いた悪名高き人物であり、血なまぐさい負の歴史の1人として、認識されている。しかし、そこには仕事の一環で、非道な行いをしていた一般市民の戦争犯罪者がいたことを忘れてはならない。

筆者は、1944年ドイツ西部で生まれ、戦後の徹底的な民主主義教育を受け、暗い過去を背負う世代であった。現在はフンボルト大学の教授で、法律学の専門だ。『朗読者』は発表後、20カ国語以上に翻訳され、アメリカではミリオンセラーを記録するほど大ヒットした。

第2次世界大戦後の敗戦国として、重いレッテルを貼られ再出発したドイツを舞台に、15歳の少年ミヒヤエルが、母親ほど年の離れた美しい女性ハンナと熱烈な恋に落ち、物語は始まる。彼女は、いつもミヒヤエルに本を朗読するように求め、次第に2人は交流を深めていくが、突然ハンナは姿を消してしまう。その後、ミヒヤエルはある裁判で、被告人として起訴されたハンナと衝撃の再会を果たす。

戦後に生まれた世代として戦争犯罪をどう捉えるべきか、ミヒヤエルは葛藤する。『それはまるで、一月また一月と生き延び、事態に慣れっこになった強制収容所の囚人が、新しく到着した人々の驚愕ぶりを無関心に眺めるようなものだった。』彼は、ナチス時代の犯罪を裁く裁判で、加害者と被害者、毎日傍聴する自分を含めた裁判官や参審員にまで及ぶ、麻痺状態についてこう表現する。罪のない人を次々に殺していく。無関心に思いやりのないまま、殺人を傍観する。周りに広がる死体を見ても、何も感じない。戦争は、多様な価値観や信念を否定し、慣れさせることで、人としての感覚を麻痺させる。そして戦後、恐ろしい過去の犯罪に日常的に触れる人々もまた、徐々に抵抗がなくなるのだ。つまり、彼らは悲惨な出来事について理解することを“諦めた”のである。一つの出来事と

して、時代の象徴として、その国独自の事件として残忍な歴史を捉え、今日の正義で糾弾することが、果たして本当に人間の過ちを振り返る、ということなのだろうか。

ハンナには、人に知られたくないある秘密があった。彼女は、それを恥辱と感じ、ばれないうように生きることによって自尊心を保っていた。誰にも理解されようとせず、周囲に非難されながらも、孤独へとひた走る彼女に、唯一秘密を悟ったミヒャエルは、彼女を助けるべきか苦悩する。例えば、あなたに被差別地域出身の友人がいたとしよう。彼は自分が部落民であることを恥じ、隠ぺいしようとする。けれども、秘密を隠すことによって彼の幸福を妨げているのだとしたら、ただ1人真実を知るあなたは、彼を救うために公に告白するだろうか。尊厳か、幸福か。併存して見える2つの感情が、実は対立関係になりうることにはっとさせられる。

『ぼくは彼女の朗読者でした。』

物語の終盤、ミヒャエルはハンナとの関係を上記のように述べている。彼はハンナとの再会後も、彼女のためにひたすら朗読し続け、尊厳を守ろうとした。それは、彼なりの愛情であり、役目であり、歴史との向き合い方であったのだ。今後もしあなたが、何か不条理な出来事に触れる機会に出会ったならば、善悪に基づいて短絡的に評価をするのではなく、大切な人が加害者であったとしたら、という仮定を心の隅に持ち続けてほしい。過ちを犯した相手とどう向き合うべきなのか、問い続けてほしい。大事な人のために自分が何者になれるのか知ったとき、私たちは本当の愛を知るのである。